国語
二―一

第五学年及び第六学年の内容
古文・漢文①

取り組んだ日　月　日

年　組　番
名前

次の古文を声に出して読みましょう。

枕草子

清少納言

春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜。月の頃はさらなり、闇もなほ、蛍の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、烏の寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入りはて、風の音、虫の音など、はたいふべきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭持て渡るも、いとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も、白き灰がちになりてわろし。

国語
二―二

第五学年及び第六学年の内容
古文・漢文②

名前　　年　　組　　番

取り組んだ日　　月　　日

次の古文を声に出して読みましょう。

竹取物語

作者不明

今は昔、竹取の翁といふものありけり。
野山にまじりて竹を取りつつ、
よろづのことに使ひけり。
名をば、さぬきのみやつことなむいひける。
その竹の中に、
もと光る竹なむ一筋ありける。
あやしがりて、
寄りて見るに、
筒の中光りたり。
それを見れば、
三寸ばかりなる人、
いとうつくしうてゐたり。

国語
二―三

第五学年及び第六学年の内容
古文・漢文③

名前　　年　　組　　番

取り組んだ日　　月　　日

次の古文を声に出して読みましょう。

平家物語

作者不明

祇園精舎の鐘の声、
諸行無常の響きあり。
沙羅双樹の花の色、
盛者必衰の理をあらはす。
おごれる人も久しからず、
ただ春の夜の夢のごとし。
たけき者もつひには滅びぬ、
ひとへに風の前の塵に同じ。

徒然草

兼好法師

つれづれなるままに、日暮らし、硯に向かひて、
心にうつりゆくよしなし事を、
そこはかとなく書きつくれば、
あやしうこそものぐるほしけれ。

国語
二―四

第五学年及び第六学年の内容
古文・漢文④

年　組　番
名前

取り組んだ日　月　日

次の古文を声に出して読みましょう。

おくのほそ道

松尾芭蕉

月日は百代の過客にして、行きこう年もまた旅人なり。
舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらえて老いを迎うる者は、
日々旅にして旅をすみかとす。古人も多く旅に死せるあり。
予も、いずれの年よりか、片雲の風に誘われて、漂泊の思い
やまず、海浜にさすらえて、
去年の秋、江上の破屋にくもの古巣を払いて、
やや年も暮れ、春立てるかすみの空に、
白河の関越えんと、そぞろ神の物につきて心を狂わせ、
道祖神の招きにあいて、取るもの手につかず。
もも引きの破れをつづり、かさの緒つけかえて、
三里にきゅう据ゆるより、松島の月まず心にかかりて、
住めるかたは人に譲りて、杉風が別しょに移るに、
草の戸も　住み替わる代ぞ　ひなの家
面八句をいおりの柱に懸け置く。

国語
二―五

第五学年及び第六学年の内容
古文・漢文⑤

名前　　年　　組　　番

取り組んだ日　　月　　日

次の漢文を声に出して読みましょう。

春暁

孟浩然

春眠　暁を覚えず
処処啼鳥を聞く
夜来風雨の声
花落つること知る多少

絶句

杜甫

江碧にして鳥逾白く
山青くして花然えんと欲す
今春看又過ぐ
何れの日か是れ帰年ならん

国語
二―六

第五学年及び第六学年の内容
古文・漢文⑥

名前　　年　　組　　番

取り組んだ日　　月　　日

次の漢文を声に出して読みましょう。

論語(ろんご)

聞一以知十

一(いち)を聞(き)きて以(も)って十(じゅう)を知(し)る。

子日温故而知新可以為師矣

子曰(しい)はく、

「故(ふる)きを温(あたた)めて新(あたら)しきを知(し)る、

以(も)って師(し)となるべし。」と。

※論語とは、中国の古代の思想家(しそうか)である孔子(こうし)と、

その弟子(でし)たちの言ったことや行ったことを記録した書物。